TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本

あなたは、まだ何にだってなれる。

# 國學院大學 人間開発学部

人間開発学部は、幼児教育・保育、初等教育そして健康管理の現場で活躍する「人づくりのプロ」を育成する学部です。「教職の國學院」として長年培ってきた人材育成システムで人間の持つ個性や素質を伸ばし、潜在能力や才能を引き出して「人間開発」を行う教育者を育てます。

■大学生
大橋英和 さん

■先生
高橋幸子 先生

■卒業生
田尻若奈 さん

CONTENTS


●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス　●大学構内のお気に入りのスポット


## ●プロフィール

### 國學院大學人間開発学部とはどんな学部ですか？

■先生
本学部のスローガンは、「ヒトを育てる人になる」――言い換えると、「人づくりのプロ」を育てることを目標に掲げています。一般的な言葉で説明するならば、教育者・指導者を育成する学部なのですが、ではなぜ従来の教育学部ではなく、あえて人間開発学部という名前にしたのか。その命名の理由に、本学部の特色が表れています。
教育学部とはみなさんもご承知の通り教員養成を目的とした学部です。しかし、私たちは学校教育に携わる人間を育てるという狭義の意味にとどまらず、大学生活を通じて、一人ひとりの可能性や存在感を開発していきたいと考えています。人はみな潜在的な能力や資質を眠らせているもの。それは、ほんの些細なきっかけで鮮やかに花開きます。私たちにできることは、そのきっかけをできるだけ多く創出することです。そんな想いから、人間開発学部という名称がつけられました。
人間開発学部が開設されたのは、2009 年のこと。今年で 9 年目を迎える、非常に新しい学部のひとつです。

## 各学科の特徴を教えてください。

■先生

人間開発学部には初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科の３つの学科が設けられています。このうち開設当初の2009年からすでにあったのは、初等教育学科と健康体育学科の２学科です。残る子ども支援学科は学部開設から４年後の2013年に新設されました。

初等教育学科は小学校教諭の育成、健康体育学科は中学・高校の保健体育科の教員ならびにジュニアスポーツ指導員や健康運動指導士などの育成を主目的としています。初等教育学科の学生でしたら副免許として渋谷キャンパスの授業に通いながら国語・英語・社会といった教科の教員免許を取得したり、健康体育学科の学生は初等教育学科の主免許である小学校教諭の免許を取得したり、実に積極的です。非常に熱心な学生が多いのが本学部の特徴のひとつです。

３つめの子ども支援学科では、幼児教育・保育を基盤とし、幼稚園教諭免許や保育士資格の取得を目指します。幼稚園免許や保育士資格は短大や専門学校でも取れますが、理論と実践に重きを置いた本学科の充実したカリキュラムは、やはり４年制ならではのものです。ニュースでも大きく報じられている通り、保育士業界は今深刻な人手不足に喘いでいます。その中でじっくりと時間をかけて、保育・幼児教育のプロフェッショナルを育てるということに、本学科の意義があると思います。

## 先生の研究について教えてください。

■先生

実は私は昨年、本学部にやってきたばかりです。それまでは長く特別支援学校の現場で働いておりました。まずはなぜ私が現場から教員養成の場に移ったのか、その背景からお話しします。

特別支援教育教諭になるには、一般的な教員免許に加え、特別支援学校の教員免許状が必要です。しかし、実際には特別支援学校で働いている先生の中で、特別支援学校の教員免許状を保持しているのは、平成27年度の文科省の調査によると74.3%。まだまだ専門知識を有した教員の数が足りていないのが現状です。

また、先程から特別支援教育と申し上げておりますが、これもかつては特殊教育と呼ばれていました。しかし、2002年に文科省が実施した全国実態調査の結果、小・中学校の通常学級において、いわゆる発達障害により学習や生活の面で特別な教育的支援を必要としている児童生徒が、6.3 %の割合で在籍している可能性があることが明らかとなりました。こうした実態を受け、学校教育法の改正によって2007年度より障害のある子どもを対象とした特殊教育から特別な教育的ニーズを有するすべての子を対象とした特別支援教育へと移行。発達障害など生活や学習に困難を抱えている児童生徒に対して必要な支援を行うことが、教育現場に求められるようになりました。また、昨年発表された教育再生実行会議第９次提言において、教員養成課程で特別支援教育に関する科目の必修化が明記されたことは、みなさんもよくご存じだと思います。

以上のような社会背景から、特別支援教育に一層の力を入れるべく、今年度より本学でも特別支援教育教員免許状授与課程を設置。私はこれまでの現場経験を活かし、特別支援教育に携わるプロを育てるために、教鞭を執ることとなりました。

## 具体的にどんなことを教えられているんですか？

■先生

特別支援教育や知的障害教育がメインですね。義務教育の教員免許をとる場合、必ず介護等体験に行かなければいけません。その事前学習として「ボランティアと社会参加」という必修授業がある

のですが、その担当もしています。また、教職課程の必修科目のひとつに「教育の方法と技術」という授業があるのですが、今年からそれも担当させていただくことになりました。これは、通常学級の教員になる方たちを対象にした授業で、先ほど申し上げたような配慮が必要なお子さんが学級にいた場合、どのようなツールや手法を用いれば、授業の内容を理解してもらうことができるかを学ぶものです。近年盛んに取り沙汰されているユニバーサルデザインの授業について、その方法論を教授しています。

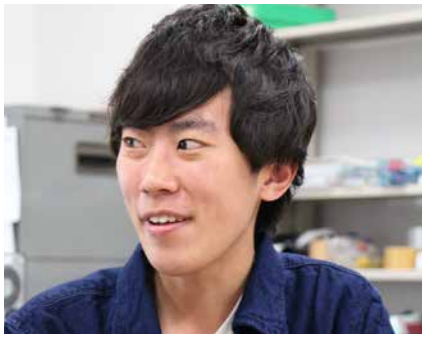
### お二人がこの学部を志望した理由を教えてください。

■卒業生

私は小さい頃、両親が共働きで家にいなかったため、学校の先生が第二のお父さんお母さんだったんです。中学生になって将来を真剣に考えはじめたとき、ふと、よく面倒を見てくださった小学校時代の先生の顔が浮かびました。よく考えれば、血もつながっていない子どもをあんなにも愛情深く育てていくなんて、すごくパワーのいることだっただろうなあと思いました。仕事に情熱がなければ、とてもじゃないけれど務まらない。私もいつか先生たちのような大人になれたらなと思い、教職を目指すようになりました。

大学選びは、最初は教員免許さえ取れればどこでもいいというのが本音でした。國學院に興味を持ったのも、教わっていた先生が國學院出身だったからです。その中で健康体育学科の存在を知り、体を動かすのは好きだし、体育の先生がいいんじゃないかなと思って、受験を決めました。

■大学生



私も今まで出会った先生たちのことが好きで、教師になりたいと思うようになりました。いろんな教育学部のある大学を受けていて、最初は國學院もあくまでその中のひとつという感じだったんですね。むしろちゃんとした意味で興味を持ったのは、受験に合格してから。いろいろ調べていくうちに就職率が高くて、教員免許取得に向けた支援制度も充実していることがわかってきて。ここならきちんと自分のやりたいことができるんじゃないかと思って入学することにしました。

## ●大学生活について

### 授業について教えてください。

■大学生

本学部の特色として挙げられるのが、「ルーム制」と呼ばれる導入基礎演習です。これは１年生前期に履修するもので、各教員のクラスに８～９名の学生が振り分けられ、レポートや発表を行います。私が選択したのは、柴田保之先生のルームです。柴田先生は重度の障害を持った子どもたちへの教育について研究されている方で、先生のルームでは実際に障害者の方をお招きする機会が何度かありました。

その中で特に興味深かったのが、柴田先生が開発した指談（ゆびだん）というコミュニケーション方法です。重度の障害を持った方の場合、なかなか上手く喋ったり、自分の意思表示をすることができません。ですが、柴田先生はこの指談を使うことで、そういった方たちとの会話を可能にしました。もともと僕の専攻は初等教育学科です。正直に言うと、それまであまり障害者の方と深く接点を持ったことがなくて。障害者の方たちのことを考えたことすらないくらい、自分にとっては遠い世界の人たちでした。ですが、こうしてルームで直接交流したことで、自然と特別支援教育に関心を持つように。後で改めて説明しますが、このルームでの経験が、その後の私の進路選択に大き

な影響を与えることとなりました。

■先生

このルーム制は本学部の初年次教育の一環として位置づけられています。大学での学びの基礎を築くことはもちろん、新しい環境下に置かれた学生のみなさんが同級の学友と仲良くなるためのきっかけづくりという意味合いもあるのです。

■大学生

それはすごく感じました。ルームは少人数なので、普通の大人数の授業に比べても、すぐに周りと打ち解けることができた気がします。

■先生

担当教員にとっても、ルームの学生については、ルームが終わった後も卒業まできちんと見守るんだという意識があります。大学生活は長いですから、その中で浮き沈みが生まれても不思議ではありません。万が一、自分の受け持ったルームの学生の成績が低下したり、授業を欠席しがちになったときは、担当教員が相談に乗ったり指導をしたり、あるいはご家庭と連携をとったりと、高校生活でいう担任のような役割を果たします。そんなふうに身近に相談できる教員がいることは、学生にとっても心強いことでしょう。空き時間になったら担当教員の研究室を訪ねて雑談をしたりランチをする学生も多いですね。こうした学生と教員の距離の近さは、本学部の魅力のひとつと言えるでしょう。

■卒業生

私がためになったなと思うのは、「教育の方法と技術」という授業です。私は健康体育学科でしたが、副免許として初等教育課程も履修していました。たとえば算数や理科の授業のとき、クラスに学習に困難を抱えた児童がいた場合、どんなふうに授業を行っていけばいいのか。そういったノウハウや応用力を授業で学べたのは、とても役に立ちましたね。

たとえば１日のスケジュールや作業の手順をイラストや写真を使って理解してもらう「視覚支援」というものがあります。今、私は特別支援学校で働いているのですが、そういった「視覚支援」が必要な生徒に出会ったとき、「そういえば大学でこんなことを言ってたな」「あんなことを授業で習ったな」と思い出すことも多いですね。

**田尻さんは最初は体育の先生を目指されていたんですよね？　そこから特別支援教育に興味を持たれたのは、どういうきっかけがあったのでしょうか？**

■卒業生

配属自体は県の要請ですが、特別支援教育自体には在学中から興味を持っていました。もともと大学に入ったらボランティアをやりたいなと思っていたんです。そこで、先生に紹介していただいたのが、発達障害があって運動が難しい児童のサポートでした。直接触れあってみたら、なんて可愛いんだろうと一気に大好きになって。特別支援こそが教育の原点だとよく言われますが、その意味を肌で実感しましたね。

子どもたちって得意不得意があって、きっと彼らのできること、できないことをパラメーターにしたら、とてもデコボコした形になると思うんです。そのヘコんだ部分を底上げして、伸びているところはもっと伸ばしてあげるのが、特別支援教育です。そう考えたら、すごく面白いし、何よりやりがいを感じます。

そこからどんどん特別支援への関心が自分の中で高まっていって、３年後期から始まるゼミでは、できれば特別支援に関することを学びたいと思って、知的障害や発達障害のある子どもの心理と支

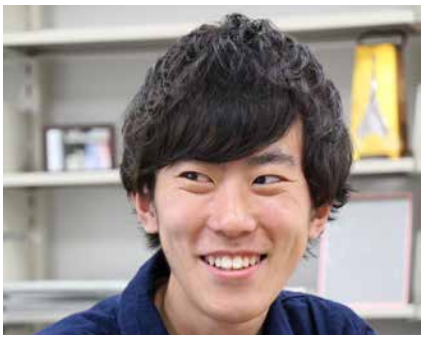
援を研究されている渡邉 ( 雅俊 ) 先生のゼミに入りました。先生には今でも仕事で何かわからないことがあったら相談をすることがあります。卒業して 1 年経ちましたが、今でもそうやって頼れる先生と出会えたことは、この大学に入って良かったと思うことのひとつですね。

### その他に学部の魅力があれば教えてください。

■先生

私が本学部に着任してこれは面白いなと思ったのが、1 年次の 9 月頃に行われる「総合講座」という名の 3 泊 4 日の集団宿泊研修です。昨年 (2016 年 ) は、初等教育学科と子ども支援学科は富士登山と青木ヶ原樹海トレッキング、さらにネイチャーゲームやワークショップなどをしましたね。健康体育学科も行き先は同じ御殿場市だったのですが、日程が別日だったため、メインイベントの樹海散策プログラムは雨で中止になりました。それでも、東京オリンピック・パラリンピックに向けたプレゼン大会を行ったり、集団行動発表会を実施したり、充実の 4 日間となったそうです。教員になれば、こうした特別活動の指導をする機会も増えます。この「総合講座」は、そのための基盤づくりの一環です。学生のみなさんには、実行委員として企画運営の段階から参加し、ノウハウを学んでもらっています。

あとは 2 年次から開講される教育インターンシップも特色のある授業のひとつですね。本学部の場合、横浜市・川崎市と連携し、地域の学校に学生を派遣しています。学生にとっては週に何時間か実際の教育現場に立つことで、よりリアルな仕事の雰囲気を知ることができますし、もちろん単位としても認められるので、非常に実践的で有益だと言えるのではないでしょうか。



■大学生

授業ではないですが、サークルでの活動も私はすごく勉強になりましたね。学部の性質上、教育関連のサークルや子どもたちと関われるサークルが多くて。私はサークル活動の一環で、1 年のときに学童保育に行きました。学童なので 1 年生から 6 年生まで、いろんな学年の子どもがいるんですよ。私たちの年齢になるとひと括りに小学生とまとめてしまいそうになりますが、1 年生と 6 年生じゃ話し方も考え方も全然違う。好きなものも遊び方も違うので、それぞれの年齢に合わせた接し方があるんだなということを改めて学ぶこともできました。

## ●就職活動、仕事について

### 卒業後の進路について教えてください。

■卒業生

私は地元である埼玉の教員採用試験に合格し、現在は県内の特別支援学校で働いています。特別支援学校に配属になったのは、先程も説明した通り、県からの打診があったからなのですが、私自身もいずれは特別支援に携わりたいと思っていたので、今はすごく毎日が楽しいですね。

大学では、実際に面接を担当していた方をお招きして面接指導をしてくださったり、教職支援についてはかなり力を入れて取り組んでくれたので、そこはすごく助かりました。

■先生

昨年の実績で言えば、初等教育科は 75％の学生が教職に就いています。健康体育学科では、保健体育教諭のほか、小学校教諭や一般企業への就職など多様な進路選択がなされています。ルームの担当教員が卒業まできちんと見守っていますので、就職率は両学科合わせてほぼ 100％に近い成果を出しています。子ども支援学科も、今年初めての卒業生を送り出しました。幼稚園、保育園、福祉

施設のほか、さまざまな職種において子ども・子育て支援の専門性を活かした活躍が期待されています。

■大学生

私はもともと小学校の先生になりたくて初等教育学科に入ったのですが、今は特別支援教育についてすごく関心があります。もともと柴田先生のルームやゼミで障害者の方と直接お話をしたりして興味を持っていたのもあります。しかしそれ以上に介護等体験で特別支援学校に行ったことが大きいですね。そこで出会った子どもたちが本当にピュアで可愛くて、もっとこの子たちと関わる仕事がしたいと思ったんです。初めて会ったばかりの私にいきなり話しかけてくれたり、手をつないでくれたり。まずその素直な感情表現に心が打たれましたね。逆に、中にはなかなか自分で意思表示ができない子もいます。私は柴田先生のルームやゼミを通じて、彼らには表出がないだけでちゃんと感情があるんだということを理解していたので、めげずにいろいろと話しかけ続けました。そうしたら介護等体験の２日目、もうこれでお別れというタイミングで、今まで何を話しかけてもずっと黙っていた子がすっと僕の手を握ってくれたんです。それがすごく嬉しくて。たとえ言葉はなくても気持ちは伝わるんだっていうことを身をもって体験しました。

今は週に１度、大学のない日に、実習でお世話になった小学校の中にある特別支援学級に行って、お手伝いをさせてもらっています。できれば、卒業した後も特別支援教育に携われたらと思っています。

**田尻さんがお仕事をされている中で、大学で学んだことが役立っていると感じるときはどんなときですか？**

■卒業生

冒頭に先生からご説明いただいた通り、人間開発学部は「ヒトを育てる人」を育てる学部です。この「人を育てる」ことって、教職はもちろんですが、たとえ教職に就かなくても、社会で働く以上、広く求められるスキルなんですね。

私を例に挙げるなら、特別支援学校の場合、複数の教員で担任を受け持つことが多いです。そのため、先生間できちんと連携がとれていないと教育が成り立たないんです。この子にはこういう指導をしたら上手くいったよ。昨日、こんなことがあったから気をつけようね。どんな小さなことでも、お互いに情報を共有し合うことが大事です。中には人から何かを教わるのが苦手な人もいます。でも、そういうスタンスでは自分は良くても子どもたちに迷惑がかかってしまう。自分が教える立場でも同じです。時には異動の関係で、教職のキャリアは相手の方が上だけど、担当する児童との付き合いは自分の方が長いというケースもあります。そんなとき、たとえ相手が先輩でも遠慮せず言うべきことが言えるかはすごく大事です。それも上から目線で伝えたら相手の反感を招くだけなので、相手を立てながら、伝えたいことを角を立てずに伝えるスキルは、教職はもちろん、どんな業界、どんな職種でも必要だと思います。

そんな「教える」「教わる」ことの原点を学べたのが、人間開発学部の４年間でした。私に限らず、この学舎を巣立った卒業生の多くが、「ヒトを育てる人になる」という人間開発学部の理念をそれぞれの場所で活かしているんじゃないかなと思います。

## ● 5 年後に向けて

### 5 年後のキャリアプランを教えてください。

■大学生

その頃、私は 26 歳。できればそろそろ担任になれているといいなとは思います。理想は、遊ぶときは生徒と同じ目線で遊ぶことができて、叱ったり指導が必要なときは、変に馴れ合ったりせず、きちんと言うべきことが言える先生になることです。常に楽しいだけじゃダメだし、だからと言ってピリピリしていても周りの空気を悪くするだけです。状況を見ながら、ちゃんとけじめをつけられる先生になりたいと思います。

■卒業生

5 年後に限らないんですけど、常に目の前にいる子どもに対して最適な教育ができる先生でありたいとは思っています。今はまだ判断に迷うこともあるし、目の前の子どもが困難を抱えている原因がわからなくて悩むことも多いんですけど、その判断がもっと速く、そしてもっと正確になれば、常に子どもたちに最適な教育を与えることができる。そこを理想として目指していきたいです。

これは教員の職業病かもしれませんが、5 年後と聞かれると、自分の将来と同じくらい、今受け持っている生徒の 5 年後を想像してしまうんです。私が受け持つ期間は限られていますが、その子の人生はこれからもずっと続いていく。だからその場限りの教育ではなく、その子のキャリアもちゃんと考えた上で、いちばんいい教育を提供できる教員になっていたいですね。

■先生

私自身のキャリアプランで言えば、当事者の感覚世界の研究成果を受け、現場にどう活かしていけるかまでを追究していきたいと思っています。たとえば聴覚刺激が過敏なため、私たちが何とも感じない音がものすごく大音量に聞こえてしまったり、あるいは視覚が大量の情報を処理できず、ものがぼんやりとしか見られないなど、発達障害を抱えている方は独特の感覚・認知を有しています。これまで彼らの目や耳がどんなふうに世界をとらえているのかはまったく未知の世界でした。が、テクノロジーの発達より、発達障害の方たちから見える世界が私たちに可視化されるようになってきました。彼らがどんな状態にあるかを知ることで、その生きづらさを軽減させられる方法も生まれてくるかもしれません。こうした技術の進歩をどう教育の現場に落としこんでいけるかを、真摯に考えていきたいですね。

## ●高校生へのアドバイス

### 高校生のみなさんに、高校生活を送る上でのアドバイスをお願いします。

■大学生

もしトライできるなら留学はしておいた方がいいと思います。英語はこれからも絶対に欠かせません。今後は小学校でも英語が正式教科になるので、苦手意識を持っていると務まらなくなりますからね。

■卒業生

いろんな分野に興味を持ったり、何か趣味を持つことをオススメします。と言うのも、多彩な経験を積んでいる人ほど子どもたちに教えてあげられることが多いんですよね。たとえば私は虫が大の苦手なので、昆虫の名前なんて全然知らない。花も興味がないので、ほとんど知識がありません。だから子どもたちに「あれは何？」と聞かれても教えてあげられないんですよ。人は自分の知識の中からしか教えられない。そう思うと、特に教員を目指すのであれば、あまり食わず嫌いせず、いろんな世界を覗いてみることは大事なんじゃないかなという気がします。

■先生
私も仕事につながらないものでいいから、何か他にひとつ好きなことを見つけてほしいなと思います。夢中になれるものがあると、その間だけは嫌なことを忘れられるしストレスを発散できる。そういう気分転換できる何かを持っておくことは、社会に出る準備として必要かもしれません。
あとはネットばかりに頼るのではなく、自分の足を動かすこと。スマホをさわっているだけじゃ出会えない人や世界がたくさんあります。自分の人間性を豊かにするためにも、ぜひ自分の足を使って、たくさんの人と出会い、知らない世界に飛び込んでいってほしいですね。

## ●大学構内のお気に入りのスポット

**校内のオススメの場所を教えてください。**
■先生
春になると、中庭の桜が満開になるんです。私のルームでもお花見をしました。たまプラーザキャンパスの桜は有名で、とても見応えがありますよ。
■卒業生
私はグラウンドが好きです。私が入学した頃に新しく整備されたこともあって、真新しいグラウンドや野球場を見るとテンションが上がりました。図書館からグラウンドで運動している学生を眺めるたびに、何だか明るい気持ちになれましたね。
■大学生
私は万葉カフェが好きです。キレイですし、スイーツも充実しているので、空きコマのときはよくみんなで時間を潰したりしていました。地域の方々もいらっしゃるので、ランチをしていると横を子どもたちが走ったりするんです。そんなところもうちの大学らしくていいなと思います。

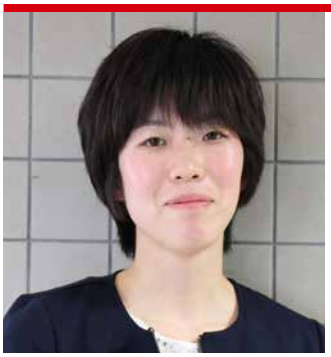
## ●インタビューに答えていただいた方々●

■先生

### 高橋幸子先生

國學院大學人間開発学部初等教育学科教授

神奈川県立厚木高等学校出身。早稲田大学第一文学部日本文学専攻卒業。筑波大学大学院教育研究科特別支援教育専攻修士課程修了。東京学芸大学特殊教育特別専攻科にて養護学校教員免許状を取得。神奈川県公立小学校、名古屋にてフリースクール、筑波大学附属大塚特別支援学校を経て現職。



■卒業生

### 田尻若奈さん

埼玉県 特別支援学校教諭

私立開智高等学校出身。國學院大學人間開発学部健康体育学科卒業。在学中、発達障害がある子どものサポートに触れ合い、特別支援教育への関心が高まる。「教える」「教わる」ことの原点を学んだ本学部の 4 年間。その場限りの教育ではなく、常に目の前にいる子どもに対して最適な教育ができる先生でありたい。

■大学生

### 大橋英和さん

國學院大學人間開発学部初等教育学科 4 年生（2017 年 4 月取材当時）

小学校の先生を目指し初等教育学科へ入学。本学部の「ルーム制」で指談（コミュニケーション方法）を学び、重度の障害をもった方と指談を使った会話で交流する。この経験が、その後の将来の進路選択に大きな影響を受ける。卒業後も特別支援教育に関わっていきたい。